

文 化 財 学 習 会

ふ る さ と 探 訪

テーマ 弦打周辺を訪ねる

講 師 川崎 正視

(香川県図書館学会副会長)

平成 2 4 年 4 月 2 2 日 (日)

共 催 高 松 市 歴 史 民 俗 協 会
高 松 市 教 育 委 員 会

1 鬼無・鶴市の地名

現在の高松市鬼無地区、香西地区、下笠居地区は、古代、笠居郷と呼ばれていました。かさおりやま 笠居山（後、笠居山かさいと呼ばれる。

現在の勝賀山の古名）の山麓をこれらの地区が取り巻くように位置していたことが、郷の名称の由来といわれます。郷内には長い間、笠居村一村だけでしたが、明治二十三年（一八九〇）から大正四年（一九一五）までの間は、上笠居村、中笠居村、下笠居村の三村に分かれていました。上笠居村、中笠居村、下笠井村は、それぞれ現在の鬼無地区、香西地区、下笠居地区にほぼ対応しています。

上笠居村は、昭和三十一年（一九五六）に高松市に編入合併した際、鬼無という地名に変わりました。鬼無の地名について、「上笠居村史」には、「上笠居村の字名鬼無は『毛無』であり、毛は木の意味であるから木無であったのではなからうか、鬼無は後世の当て字で仮借であらう。城生の意味であれば城砦ということになるであらう」と記されています。ま



永代橋から見た石清尾山



本津川に架かる永代橋から
勝賀山を望む

た、「南海通記」には、悪鬼退治により鬼がいなくなったので鬼無といわれるようになったとあります。

一方、かつての飯田郷に属していた鶴市の地名については、一説には、かつて鶴市地内の一部が低い湿地帯であった頃、たくさんの鶴が飛んできて鶴が市をなすような様相を呈していたことが由来しているといわれます。

また、清和天皇の貞観年間（八五九～八七七）に聖宝僧正により詠まれた歌「弦打つるうち」の山の端出ずる月かげは狭峰の島の帆かけ舟哉」にも出てくるように、古くから「弦打」という地名が使われていましたが、「弦打」ということは、当時、神の鳥として捕獲を禁止されていた鶴を打つというように聞こえるため、延宝年間（一六七三～八一）頃に「鶴市」と改称されたともいわれています。

2 JR鬼無駅

鬼無駅は、明治三十年（一八九七）二月、讃岐鉄道丸亀～高松間開業と同時に開設され、昭和二十八年（一九五三）十月、鉄筋コンクリートの現駅舎に改築されました。昭和三十六年四月、高松～多度津間の単線自動車の完成により、列車の本数も増加し、十両・十一両編成の列車が発着し、駅ホームは多くの通勤客でいっぱいでしたが、そ

の後は、自動車の発達で、乗降者も減少していきました。昭和四十年九月に高松く香西間、四十二年九月に香西く鬼無間、四十五年三月に鬼無く端岡間が複線化されています。

- ・電化 昭和六十二年三月二十三日
- ・JR四国 昭和六十二年四月
- ・瀬戸大橋開通 昭和六十三年四月

現在も、鬼無駅では、かつて構内に三線あったという跡や転轍機てんてつきの跡を見ることができます。

3 鬼無を通る遍路道

四国八十八ヶ所巡りで、八十番国分寺から八十一番白峯寺を経て八十二番根香寺ねごろに至り、八十三番一宮寺に達する遍路道が鬼無地区を通過しています。根香寺から赤子谷、県立高松西高校を経て、県道とJR予讃線を越え、JR鬼無駅の南側へと出るコースですが、途中、道標どうひょうや丁石ちようせきがよく見られます。



駅構内に残るかつての線路跡地
(写真左側)



鬼無駅ホームの基底部に残る
かつての階段跡

JR 鬼無駅から南へ二百メートル程行つたところが、根香寺より一宮寺への遍路道と^{みまやみち}「御厩道」が交差する地点で、付近は^{あんじく}安徳と呼ばれ、交差点そばに「右いちのみやみち」の道標と「八幡宮」の燈籠があります。この道標・燈籠と道を挟んだ向かい側に^{おおふるや}「大古家」があり、橋本仙太郎氏が昭和五年（一九三〇）に発表した桃太郎伝説で、老夫婦が居住していた跡とされ、また、源平の屋島の戦い当時（寿永三年（一一八四））安徳帝の行幸があった所とも伝えられています。^{おおふるや}大古家の屋敷内には安徳帝が使用したと伝わる「安徳の井戸」が残っています。道標・燈籠の南側には「安徳墓地」があり、墓地の脇に「一宮へ六十七丁」と書かれた道標が立っていて、根香寺より一宮寺の行程のちょうど中



安徳墓地にある「一宮へ六十七丁」の道標



「右いちのみやみち」道標（右下）と「八幡宮」燈籠（左）

間地点となっています。なお、この墓地には、鬼無の盆栽振興のため尽力した「鬼無半山」の墓もあります。

遍路道をさらに進むと、永代橋えいたいばしに出ます。この橋は接待橋せったいばし

ともいわれ、かつては近くの住民が豆腐汁でお遍路さんの接待をしていたそうです。昔、永代橋が架かっていなかった頃は、川の中を渡って飯田へ行っていました。永代橋を渡ったところには、流水灌頂るすいかんぢようの「卒塔婆」と、「顎無地藏あごなし」をお祀りしたお堂があります。遍路道は、ここを東に進み、道祖神（サイノカミ）から代官道だいかんみちを通じて四ツ又地藏へ、さらに一宮寺へと通じています。



卒塔婆



顎無地藏



安徳(写真奥)側から永代橋(写真手前)側へと通じる「遍路道」

※ 御厩道 みまやみち

円座を起点に檀紙、御厩、鬼無を通って香西港へと続く脇往還です。脇往還とは、江戸時代の五街道以外の主要な街道のことで、「脇街道」や「脇道」とも呼ばれていました。御厩道は、ほぼ現在の県道円座香西線にあたり、鬼無では、丸亀街道の西ルート（旧道）きゅうみちと重なっています。御厩道が本津川を渡る地点にある「落合橋」では、橋の北が鬼無、橋の南が御厩となっています。

御厩道は、御厩焼がここを通して香西港に（鉄道開通後は鬼無駅に）荷馬車等で運ばれていたことから、焼き物街道と呼ばれることもありました。戦後しばらくは、道沿いに製陶所が軒を並べ、生活雑器を満載した馬車や大八車の往来が見られました。

※ 丸亀街道

天正十六年（一五八八）生駒親正は、高松に築城し、慶長二年（一五九七）丸亀に支城を設け、高松の常盤橋ときわを起点に五街道（高松藩五街道）を作りました。その一つが丸亀街道で、兵庫町・郷東を通り、中津の道標を左手に一里塚・一本松・三軒家を通り抜け、鬼無・丸亀に通じています。

慶長九年（一六〇四）幕府の命により一里塚が領内につくられた際、丸亀街道も整備され、天保期（一八三〇～四四）頃には、起点の常盤橋から綾北條の衣掛こかけまでの間

は、兵庫町・西通町から香東川の口銭場までを通る西のルートと、丸亀町・南新町から鷺田・小山までを通る南のルートの二つがありました。西のルートは、鬼無から衣掛池まで笠居郷を通っていました。この道は、鬼無では一般的に「旧道」と呼ばれます。（「新道」：南バイパス開通前の国道十一号線・現県道、「旧道」：新道開通前の国道十一号線・旧丸亀街道）

4 岩田神社

祭神 応神天皇（★）、仲哀天皇、神功皇后

創祀 岩田神社の創祀ははっきりしませんが、治承二年（一一七八）八月に、寒川郡の宝蔵院（現長尾寺）の朝算法師によりこの地に祀られたのが最初とされています。保元の乱（一一五六）に敗れた崇徳上皇が讃岐に配流された際、侍医として上皇に随行し讃岐にやって来た唐渡左門雅基の子信宗が、上皇崩御の後、飯田郷に移住し、当社を勧請したとも伝わっています。もと飯田八幡とも呼ばれ、飯田郷の産土神（氏神）であり、明治の頃には郷社の社格を与えられていました。



岩田神社

日本では、平安時代に、日本の従来の神は、仏教の本地（根本）である仏や菩薩の現れであるとして、神仏を一つにして考^{ほんじすいじゃく}える本地垂迹説が広まり、岩田神社でも、本地仏として阿弥陀如来をお祀りし、神として応神天皇・仲哀天皇・神巧皇后をお祀りしていました。明治に入り、神仏分離令が出ると、神と仏を分け、神として鏡を祀り、阿弥陀如来は近くの光明寺に移されました。

一方、蓮香寺^{れんこ}は、岩田神社の守護寺（神宮寺）で、本尊は千手観音像です。明治時代に神仏分離令が出されるまでは、蓮香寺の僧が、岩田神社の祭事を司っていました。現在、岩田神社のすぐ南側に千手観世音菩薩安置所（観音さん）が残っています。

岩田神社がある場所は、宮の窪と呼ばれ低地になっていますが、表土を除けば、地下六〜七メートルまでの土質が砂と丸い小石からできていること、岩田神社のある位置から本津川までが、三段程に低くなっていること、^{かがんだんきゅう}河岸段丘をなし



岩田神社（本殿）



岩田神社（拝殿）

ていることから、本津川の流れによってできた広い洲で、草木の生い茂った川原だったと考えられます。

「(★)伝記では、応神天皇は、十四代仲哀天皇の皇子です。当時九州に熊襲くまそというものがいて、常に大和朝廷に反抗して従いませんでした。これを征伐するため、天皇は筑紫ノ国に都をうつされました。即位九年、天皇は熊襲征伐の流れ矢に当たって亡くなり、神功皇后がこの後を継いで政治をされました。

時に住吉大明神のお告げにより、熊襲のあと押しをする三韓（後に百済、新羅、高句麗となる朝鮮半島の三国）を征伐しましたが、その時に神功皇后は男装をして、勇ましく船を率いて新羅（朝鮮半島の南西辺りにあった国）に向かいました。すると、新羅王はその威容に恐れ、戦わずして降伏しました。ご帰還後お産みになったのが応神天皇なので、応神天皇を勝ち戦の神として、仲哀天皇、神功皇后と合祀して八幡宮にお祀りされるようになりました。」

※ 岩田神社のフジ

くじやくふじ

通称「孔雀藤」と呼ばれており、五月には最大二メートルにもなる紫色の花房を多数付けます。

「孔雀藤」は、樹齢八百年を数えると推定され、その名称は明治三十年（一八九七）頃に、孔雀の羽のように艶やかな藤であるというところから付けられました。葉よりも花が先に咲き、その花の長さが一メートルくらいまで垂れるので有名です。ちょうど藤の開花の時期に春のお祭りが行われ、飯田の藤市と呼ばれています。

昭和十四年（一九三九）、香川県天然記念物に指定され、昭和四十六年十月、香川県の自然記念物に指定されました。

※ 岩田神社のイスノキ（高松市の名木）

イスノキ（＝和名）（別名 ユスノキ、ユシノキ、ヒョンノキ）は、暖地に自生するマンサク科の常緑高木で、本州西南部、四国、九州に分布しています。樹皮は灰白色で、大木になると赤っぽくなります。葉は厚く楕円形をしており、表面にツヤがあります。岩田神社のイスノキは樹高が約九メートルあります。葉によく「虫こぶ」がつくのがこの木の特徴で、イスコムネアブラムシの寄生では葉の表面に多数の小型突起状の虫こぶができ、イスオオムネアブラムシの寄生では



岩田神社のイスノキ

丸く大きく膨らんだ突起状の虫こぶ（ひよんの実）ができます。ひよんの実は内部が空洞になるので、それを笛のように吹くと「ひよう」と鳴り、これがヒョンノキと呼ばれる由来です。イスノキは乾燥させると非常に堅く丈夫になるので、家具財や木刀・杖などに利用されています。

5 唐人塚とうじん

豊臣秀吉の命を受けて、文禄の役（一五九二）に出兵した讃岐国領主、生駒親正・一正は、朝鮮半島から何人もの捕虜を連れ帰って、諸国に分散して労役に服せしめたと言ひ伝えられています。

この地方にも、八人の捕虜が唐戸資宗すけむねの監督のもと配流されました。ところが八人は将来を案じたか、恥を忍びきれなかったのか、自殺をしてみましたといひます。土地の人々は、彼等をあわれみ、唐戸家墓地の一隅に墓をたてて葬ったと伝えられています。以来四百年唐戸家の人々によって守られています。なお、死亡要因については、はげしい伝染病の流行のためとす



唐 人 塚

る説もあります。

6 飯田城跡

飯田城は飯田町定木^{じょうぎ}にあつたといわれていますが、その遺構は確認できていません。

南北朝の動乱期、飯田城の城主であつた飯田主水正^{もんのしょう}は、南朝方の細川清氏を討つため鶴足津^{うたづ}（現宇多津町）に上陸した細川頼之の元へ馳せ参じ、頼之に従つて、清氏との白峰合戦や伊予の河野氏討伐にも加わつたといわれています。さらに、天正十年（一五八二）八月、土佐の長宗我部元親が香西氏を攻めた際には、香西氏の先鋒に加わり鬼無町是竹の伊勢神宮の馬場に打つて出て奮戦しました。天正十三年の秀吉の四国征伐の折、主家香西氏を失いますが、二年後、生駒親正が讃岐の領主となつて諸豪族を取り立てた際には、城主の飯田伝右衛門も召し抱えられました。

7 筑城城跡・城王（尾）神社

筑城城^{つづきじょう}は、鎌倉時代から戦国時代にかけて香川・阿野二郡を治めた香西氏に仕えた

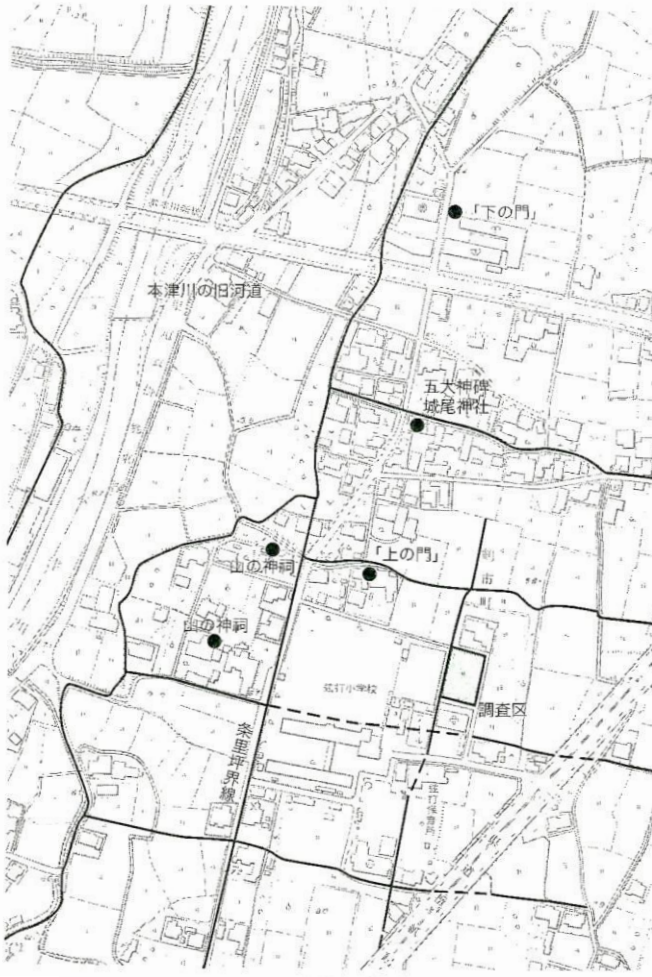


「飯田城跡」説明板横にある祠

筑城氏の居城として、古くから知られていました。江戸時代後期に編纂された「讃陽古城記」や「讃岐國名勝図会」にも記述が見られ、その該当地として、弦打小学校北側の集落の中に残る「上の門」、「下の門」などの地名、城王（尾）神社の位置など神社を中心とした

およそ方二町（二百メートル）の範囲が推定されています。

弦打コミュニティセンターの新築に先立つ発掘調査では、奈良時代以来の条里と呼ばれる土地区画と合致する溝や石組の井戸跡とともに十三



筑城城跡周辺図
(1999年10月高松市教育委員会報告書より)

十五世紀の輸入磁器片や日常雑器の土器、銅製十一面観音念持仏などが出土しており、付近に筑城城があつた可能性が一層強まりました。

筑城氏については、江戸時代中期の軍記物語「南海通記」に散見することができ、香西氏に従って活躍しています。卷十「香西宗心備州児嶋陣記」では、元龜二年（一五七一）の香西宗

心つづきせいざえもんによる備前児島加陽城攻めに参加しており、城持の旗下として「下飯田筑城清左衛門尉」の名があげられています。卷十五「香西伊勢馬場並西光寺表合戦記」は、天正十年（一五八二）八月に長宗我部元親軍が香西氏を攻めたときの話として、激戦区であつた伊勢馬場合戦（鬼無町是竹）の先方隊として「下飯田筑城清左衛門尉」の名が見られます。

さらに、卷十七「土佐兵将退去讃州記」では、豊臣秀吉の四国攻めに対して、天正十三年五月に香西氏が居城を藤尾城（香西本町）から西長尾城に移す軍議を開いており、参加者の中に「筑城清左衛門」の名が見られます。香西氏滅亡後、筑城氏の動向ははっきりしませんが、天



はたもと



城王(尾)神社



弦打コミュニティセンター内に展示されている出土品（上：銅製十一面観音念持仏 下：土師器古皿など）

正十五年に豊臣秀吉家臣生駒親正が入部したとき、召し出されて二百石を賜ったと伝えられています。

8 水分神社（王墓古墳）

祭神

水分神、国水分神（水を分け流す神様）

高麗神、閻魔神（龍現様という雨の神様）

岩田神社の末社であり、本津川下流域東岸の丘陵上に立地しています。

古墳の南東約三百メートルに相作牛塚古墳が所在しており、古墳時代中期末から後期初頭にかけての古墳群を形成していたものとみなされます。

現在南北約二十メートル、東西約十五メートルの長方形のマウンドを持ち、周濠状の堀切りと推定される周囲の水田も外縁線が直線的であることから、方墳の可能性もあります。円墳であれば直径約三十メートル近いものとなり、墳頂部には十×八メートルの平端部があります。

香東川、本津川の度重なる氾濫に苦しんだ弦打地区には、水分



水分神社の遷拝所



水分神社

神を祀る神社・小祀が多く、その多くは水神さんと呼ばれています。

9 丸亀街道と金毘羅燈籠

江戸中期から、丸亀街道を通って金毘羅宮へ参拝する客が特に多くなりました。街道は、信仰・娯楽・商業のための往来が絶えず、讃岐の道はすべて金毘羅に通ずるといわれた程です。中津・大暮なかづ おくれに金毘羅燈籠が建立（寛政九年（一七九七））されたのも、この頃です。

金毘羅燈籠は、かつての主要な金毘羅道（金毘羅街道）に、ほぼ五百メートルおきに建てられていました。とくに旧道の交差点や屈曲点には必ず建てられていて、夕暮れからは地区の当番によって灯がともされ、人家のまばらな田舎道での道路標識の役割を果たしていました。

金毘羅燈籠は、金毘羅大権現の文字が金毘羅に向かうように建てるのが通例とされていますが、もともと当てはまらないものも多いうえに、後に設置場所が移動している燈籠の場合は、約束を無視して設置されているものも多く見られます。

燈籠に刻まれている寄進者名には「講中」「氏子



金毘羅燈籠（大暮・本津川沿い）

中」「組」などの表示が多く、中には特定の寄進者
名を刻まず「万人講」と刻んだものもあります。

かつて鬼無を通る街道のところどころに松並木
があり、太平洋戦争末期までは、香東川の堤防か
ら本津川の川岸にかけての付近に、大人でふた抱
えもあるような松が数十本程もあり、街道を行き
かう人々に涼しい影を提供していました。本津川
の川岸には一面竹林が生い茂っていたことから、
今も「竹林」という地名が残っています。



金毘羅燈籠

(鬼無町藤井・本津川沿い)

【参考文献】

『高松市立弦打公民館改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 筑城城跡』

平成十一年十月 高松市教育委員会

『香川考古』第三号 平成六年 香川考古刊行会

『ふるさと鬼無』 平成十九年年六月三十日 鬼無地区連合自治会 会長 波多 等

『弦打風土記』 昭和四十四年三月三十一日 高松市弦打小学校 P T A

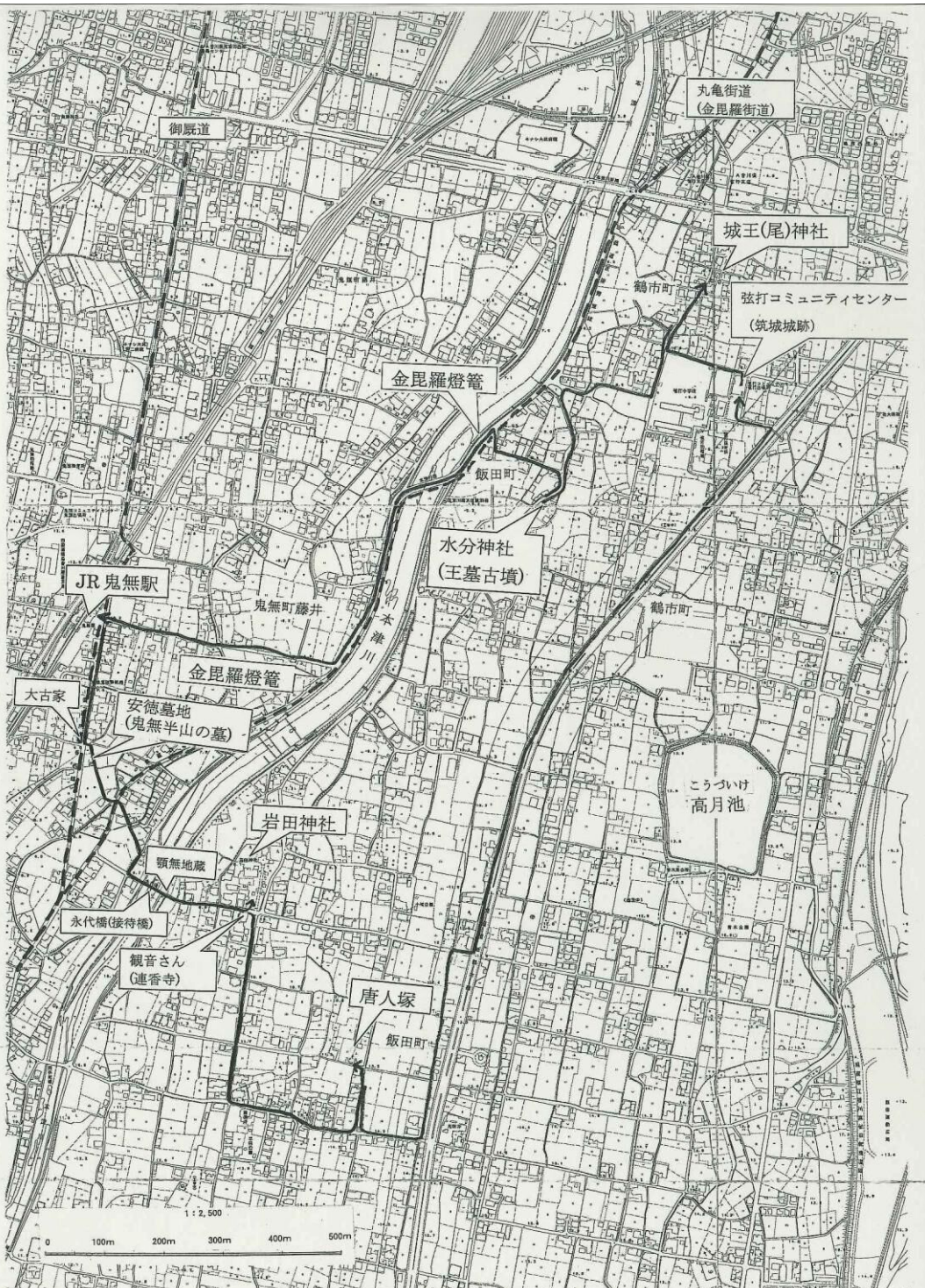
『郷土史事典 笠居郷探訪 香川県高松市 鬼無・香西・下笠居の歴史／民俗／地名』

平成二十三年九月十九日 立山 信浩 著

『香川県の地名』 平成元年二月二十三日発行 平凡社

『古城跡を訪ねて 高松市の文化財・第七編』秋山 忠著

昭和五十七年三月 高松市歴史民俗協会・高松市文化財保護協会発行



4月22日（日） 鬼無町からの復路

J R 予讃線

（J R 鬼無駅） （J R 高松駅）

12：17 発 → 12：25 着

12：45 発 → 12：52 着

13：14 発 → 13：22 着

次回のふるさと探訪は・・・

テ ー マ 太田周辺の出水と神社を巡る

と き 平成24年5月27日（日）

9：30～12：00

集合場所 ことでん三条駅

講 師 藤井 雄三（高松市教育委員会教育局次長）

☆広報「たかまつ」5月15日号に開催案内を掲載しますので、ご覧ください。

☆小雨決行。警報発令等により中止の場合のみ、文化財課（TEL 839-2660「午前7時30分～開始時間まで」）でお知らせします。（電話が通じない場合は、「実施」です。）



★集合場所への交通案内★

ことでん電車【琴平線・下り】

（瓦町駅） （三条駅）

8：50 → 8：55

9：05 → 9：10

9：20 → 9：25

「ふるさと探訪」に 参加される皆様へ



※ 参加中は、次のことに充分留意し、
安全で意義のある探訪としましょう。

- 1 交通ルールを守り、交通安全を心がけましょう。
(必ず、歩道を歩き、歩道が無いところでは、道路の端を一列で歩きましょう。)
- 2 無理をせず、体調には十分気をつけましょう。
- 3 引率者の指示に従い、整然と行動しましょう。
- 4 マナーを守り、他人に迷惑がかからないよう気をつけましょう。
- 5 文化財や自然を大切にしましょう。